

書評

谷口功一・スナック研究会編著

『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』

(白水社、2017年)

宮野 真生子

スナックが今ちよっとしたブームだ。そのブームの一端を担っているとも言えるのが本書である。だが、これはお気楽なエッセイなどではない。序章で編者の谷口が強調するように、この書は政治・文学・法律・思想などの専門家による全8章(+補章)と2つの座談会がおさめられた、「スナック」についての本邦初の学術的研究の試み」(p.7)なのである。

なぜスナックなのか。それは副題にあるとおり、スナックという場がある種の「公共性」を可能にするからだという。「公共性」と聞くと少し構える人がいるかもしれない(評者がまさにそのタイプだ)。理性的な討議を通じて、市民社会を作ろう。それはたしかに理想的なことかもしれないが、スナック研オブザーバーの横濱竜也が言うように、こうした「公共性」を誰がどこで経験するのか。経験の裏づけがなく、切実さを実感していない「公共性」を、誰がどうやって支えていくのか」(p.209)。現実感のないまま言葉だけが一人歩きし、何となく近寄り難く、お堅い感じになってしまう。しかし、公共というものが異なる価値観をもつ多様な他者との開かれた関係というのなら、真真正面からの議論だけが方法ではないはずだ。理性一辺倒ではない柔らかな公共性、それを可能にするのがスナックという空間である。

スナックには様々な客が来る。家庭でも仕事場でもない中間の空白地帯。しがらみのないところだからこそ、人はふと本音を漏らす。その本音が真っ向からぶつかることはない。はぐらかし、ときになぐさめ、引き受けながら、他の人も少しずつ語り出す。向かい合う語りではなく、カウンター横並びで繋がる語り。そこには現代の都市社会を生きる者たちがかりそめに形成する共同性がある。荻部直が第7章「スナックと「社交」の空間」で明らかにするのは、こうした社交の場として機能するスナックの来歴である。一方、第1章高山大毅

「スナックと「物のあはれを知る」説」では、カウンターで繋がるための作法が近世日本の花街から掘り起こされる。高山が手掛かりにするのは江戸時代の花街を支えた「粋人」「通人」の生き方である。「粋」は「推量」の「推」に連なり、「通人」は人情の「通じた人」を意味する。遊び人とは、不真面目な金持ちなどではない。「人間関係のさばき」方を心得た「コミュニケーション能力」の高い人こそ、「通人」と呼ぶにふさわしい。それは声高に自分のことを語ったり、したり顔で蘊蓄を披瀝する(それは「野暮」な「半可通」だ)ことではない。「通人」はむしろ目立たない。角が立ちそうならやんわり宥め、その場の語りを繋げ、本人はひっそりと飲んでいたりする。そうやって身につけていく他者への所作こそ、柔らかな公共性を可能にする第一歩なのではないかというわけである。

だが、こうした柔らかさを求める態度は、ときに語りそれ自体を阻害する要因にもなり得る。高山は「粋」の精神が「他者の感情にしみじみ共感する」ことを重視する本居宣長の「物のあはれを知る説」に接近するとしただうえで、一方で宣長のそうした態度の裏側には「議論好き」の嫌忌があったと指摘する。横並びの柔らかな繋がりとは、ときに「堅物」を嫌い、難しい話はしたくない、という雰囲気醸成することがある。そのとき、スナックは単なるストレスのはけ口、気晴らしのための何でもありの空間に変わる危険性を帯びる。しかも、そこが男同士の「ホモソーシャルな空間」であるなら、なおのことだろう(第6章河野有理「〈二次会の思想〉を求めて—「会」の時代における社交の模索—」を参照せよ)。だとすれば、スナックという場を問うには、そもそも「遊び」とは何か、「社交」が求めるのは何なのかという議論が欠かせない。「遊び」や「社交」がもたらすものがストレス解消や気分の共有といった感情的紐帯にとどまるのであれば、しばしば批判されてきた日本における情に基づく道徳的共同体の問題点を反復することになるだろう。重要なのは、感情への注目と同時に、遊びのなかで働く知性のあり方、ロゴスの機能を問うことではないか。これからのスナック研の活動に感情と知性、その相互作用の先で具体化される柔らかな公共性を期待し、この書評を閉じる。